

妹が「いない」と捨てた
伯爵様と結婚したのに、
今更返せと言われても困ります

◆ ————— ◆
当麻リコ
Riko Toma

Regina
BUNKO

CHARACTERS
登場人物紹介

ジェマ

ブラクストン家のメイド
三人衆の一人。
一見おっとりだが
誰よりも鋭い。

ハンナ

ブラクストン家のメイド
三人衆の一人。
ユリアを狂愛する。

アニー

ブラクストン家のメイド
三人衆の一人。
口の悪さは天下一品。

ニーア

ユリアの妹。男遊びが派手。
ジェレミーと過去に交際していた。

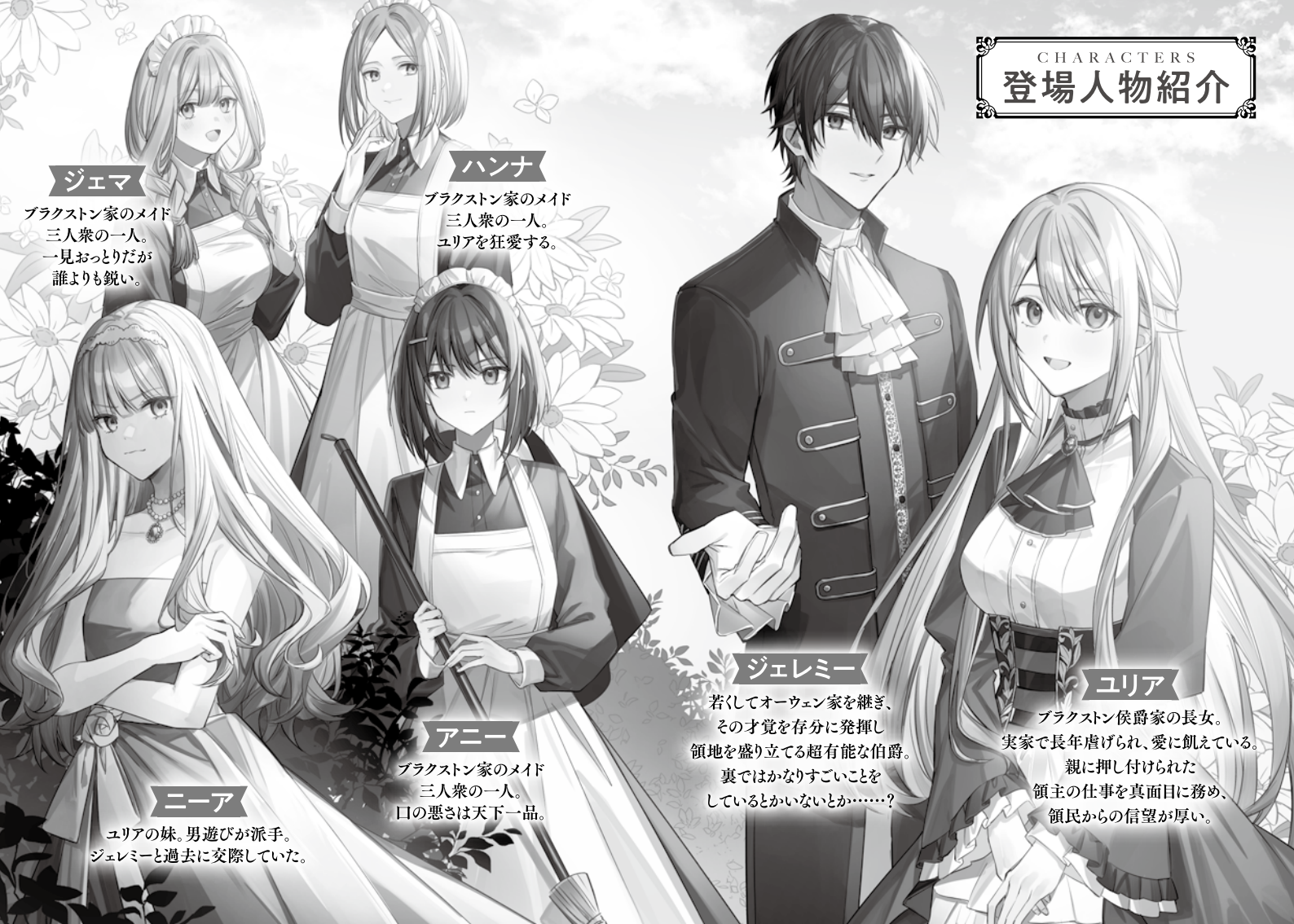


ジェレミー

若くてオーウェン家を継ぎ、
その才覚を存分に発揮し
領地を盛り立てる超有能な伯爵。
裏ではかなりすごいことを
しているとかいないとか……？

ユリア

ブラクストン侯爵家の長女。
実家で長年虐げられ、愛に飢えている。
親に押し付けられた
領主の仕事を目に務め、
領民からの信望が厚い。



目次

妹が「いらない」と捨てた伯爵様と
結婚したのに、
今更返せと言われても困ります

番外編

ニア・ブラクストンの顛末

書き下ろし番外編

落ちる覚悟はもうできている

妹が「いらない」と捨てた伯爵様と
結婚したのに、

今更返せと言われても困ります

プロローグ

「やあ、これはこれは」

唐突な深夜訪問に、思い切り嫌な顔をされる覚悟で通された客間で待っていた。

けれど程なく現れたジェレミーは、清々しいほどの爽やかな笑みを浮かべて私たちを歓迎してくれた。

「ようこそユリア。それにメイドのお三方。歓迎しますよ」

一切の疑問を差し挟む気配もなく、優雅にソファに腰を下ろしてにこりと微笑む。その微笑は、私の座るソファの後ろに立ったまま、警戒するように控えているメイドたちにも等しく向けられた。

「……もしかして、知っていらしたのですか」

その表情を見て、自然とそんな言葉が口からこぼれ出た。

何を、とは言わなかった。それだけで彼には伝わると思ったから。

だってあまりにもタイミングが良すぎるのだ。

確信の滲む私の言葉に、ジェレミーが苦笑する。

「否定したら信じてくれますか」

「ええ、信じます。なんのことか分からないとあなたがおっしゃるなら、きっとそうなのでしよう。私の考えすぎです」

もちろんその可能性のほうが余程高い。

自覚はないけれど実は私は発狂寸前で、訳の分からぬ妄想でジェレミーを困らせているのかもしれない。そうでないと強く言えるほど、自分の冷静さに自信はなかった。

「突然現れて何を訳の分からないことをと言われたら、今すぐにもこの場を去りますわ」

まっすぐにジェレミーの目を見てそう言うと、彼は苦笑の色を濃くした。

「黙っていてよと思うていたのですが……」

視線を落として嘆息する。それから私の背後に控える三人に何やら意味ありげな視線を送って、最後に私に視線を据えた。

「フェアじゃないのでやはり白状します。それを聞いてから判断してください」

そう言うとジェレミーは笑みの気配を消して、これから語ることへの覚悟を決めたよ

うに、深く深く息を吐いた。

それはどこか諦念と自嘲の混じったような、複雑な表情だった。

やはりこれは彼の復讐なのだろうか。

もし、彼を捨てたというニアへの復讐に利用されているのだとしたら。

私はそれを甘んじて受け入れるべきなのかもしれない。



「ねえ聞いてよユリアお姉様。彼ったら昨日もネックレスを買ってくれてね？」

妹のニアが、可愛らしい顔を綻ほころはせながら話し始める。

「そのうえ薔薇の花束までくださったのよ。お花はもういらないうって言ってるのに、『キミが綺麗だからどうしてもプレゼントしたくなってしまっただ』って」

滑らかな頬を薄紅色に染め、ハニーブロンドの髪を指先でくるくるといじっている。

こちらの事情もお構いなしで、聞いてもないことを捲まくし立てるのはいつものことだ。

男の人とデートをするたびに、プレゼント自慢だの愛の言葉自慢だのをしに来るのはそ

ろそろやめにしてほしい。

ため息をつきたくなるのを堪えて、仕方なく耳を傾ける。

わざわざ私の仕事中に執務室に来て、来客用のソファにふんぞり返って益やく体たいもない話ばかり。たぶん、デートがない日はヒマなのだろう。

追い出したり無視したりすると余計に面倒なことになるから、仕事の手を止めずに適当なタイミングで相槌を打つ。たまに感心したり羨ましがれるフリをしなければならぬのが億劫だ。

生まれてからずっと両親に甘やかされてきた妹は、常に自分が優先されて当然だと思っている。そのうえ、姉の私を便利な小間使いか何かだと思っているのだ。

両親が私をそう扱う姿を見続けてきたから仕方のないことではある。私ももう慣れてしまった。

地味で面倒な書類仕事や領地内の視察、情報収集はいつも私。

美人で社交的な妹は、パーティーへの顔出しのような華やかで目立つことばかり。

当然、出会いは妹のほうが多い。というか私は皆無だ。

きつと妹は気に入った貴族令息に好きなように嫁入りし、私は親の都合のいい性格の釣り合った相手を見繕われて婿を取らされるのだろう。

侯爵家の長女だから、好いた相手に嫁がせろという気はなかったが、私の意見がまるで反映されないのは目に見えていた。結婚には夢も希望もない。

両親の妹^{びいき}眞はニアが生まれてからずっとで、今更抗議する気にもなれなかった。書類へのサインが片付いて、一息入れるついでに彼氏自慢を続ける妹の話をもう少ししっかりと聞くことにした。

普段ならば風の音程度に聞き流してしまうところだけど、今ニアがお付き合いしている人には少しだけ興味があったのだ。

「それで彼は宮廷料理人さえ恐れるほどの美食家だから、もう食べることは趣味というより人生なんですって」

素敵よね、と私にはあまり理解できないセリフを誇らしげに反芻^{はんすう}するニアに、おや？と首を傾げた。

「伯爵様はオペラがお好きなのではなかった？」

「伯爵？ 誰のこと言ってるの？」

前に聞いていた情報と違うな、と気になって聞くと、妹は怪訝そうに眉根を寄せた。

「誰って……オーウェン伯爵様よ。彼の話をしていたのでなかったの？」

彼のことをしきりに話していたのは、つい先日のことだったように思う。



ニーアが彼を屋敷に連れてきた時のこともよく覚えていて。しつかりと人の目を見て話す、落ち着いた感じの人だった。珍しく印象に残る方だったからよく覚えていて。「ハッ、いつの話をしているのよお姉様ったら。あんな地味でつまらない男、とつくに捨ててやったわ。今付き合ってるのはフェルランド侯爵家の方よ」

嘲笑を交えながらどこか得意げにニーアが言う。きつと前よりもさらに爵位が上の方とお付き合いでできる自分が誇らしいのだろう。

その顔はひどく歪んで見えた。

——また恋人が変わったのね。

微かな苛立ちと共にそんな感想を抱く。

花よりも宝石よりも美しいと称される妹だが、時に醜悪に見えることがある。

そんなふうに見えるのは、私の中の醜い心のせいだろうか。

「……そう。ほどほどにね」

ニーアに答えながら、思わず眉間にシワが寄る。

いつもはニーアの恋人が変わってもなんとも思わないのに、今日はどうしてこんなにささくれ立った気持ちになるのか。自分でもよく分からない感情の動きに首を傾げたくなる。

妹は十六で社交界デビューして以来、その美貌を生かして恋人をとつかえひっかえしている。妹の好みは分かりやすく派手な容姿で、金払いも良く歯の浮くような愛の言葉を並べ立てるお金持ちのお坊ちゃんばかりだ。

正直、毎回紹介という名の自慢のために連れてこられても、歴代彼氏の顔の見分けはつかなかった。申し訳ないことに全員同じに見えるのだ。

そんな恋人たちの中で、オーウェン伯爵だけは妹の好みとは外れているように思えた。ほぼ三ヵ月ごとに更新される男性遍歴はほとんど覚えていないが、彼だけはハッキリと記憶に残っていた。

妹に地味と評された容姿は、確かに派手ではないが整った綺麗な造作をしていたように思う。真面目な人柄がよく伝わる丁寧な喋り方をして、若くして伯爵家当主を継いだからか金銭感覚もまともで堅実なようだった。少し話をしただけで、彼の人柄に好感を持っていた。

親のお金をばらまいて遊びまわるような歴代彼氏たちに比べたら、つまらなく思えるかもしれない。けれど妹もようやく身を固める前提で相手を探すようになったかと感じしていたのだ。それなのに、紹介されてからまだ一ヵ月も経っていないうちに別れてしまったなんて。

そこでイライラの理由に思い至る。たぶんこれはそう、もったいないと思ってしまうのだ。ニアアがオーウェン伯爵と結婚しないことを。今まで妹が連れてきた中で、唯一と言えるくらいにまともな人だったから。

彼ならこの奔放な妹も落ち着くことだろう。そして妹が嫁いだ後も、我がブラクストン侯爵家と良いお付き合いを続けていけるはず。そう思える相手だった。

今自慢している彼氏はもう別人らしく、確かによく聞けばいつものパターンの軽薄なノロケだ。

どれだけお金を使ってもらえるか。

どれだけ素晴らしい愛の言葉をもたらえたか。

それら全てが、イコール自分の価値だとも言わんばかりだ。

まったくもって羨ましくもなんともないのだけど、妹は本気で私が悔しがると思って話しているらしい。まだノロケ足りない様子だったけれど、残念ながらそのなんとか侯爵様の話には興味が持てない。

時計を見ると、休憩から十分が経過していた。

次はミスの許されない経理仕事だ。さすがに喋り続けるニアアがいては集中できない

ので、適当なところで切り上げて部屋から追い払ってしまいたい。

「そろそろ真面目にやりたいから、お喋りはおしまいにしましょう」

「ええ、お姉様だって聞きたいでしょう？ フェルランド侯爵家のアンドリュー様よ？ とても素晴らしい方なの。今度連れてくるわね。お姉様にも紹介したいの。会ってくださるわよね？」

「はいはい。時間があればね」

「引きこもりなのだからいつでもヒマでしょう？ こんな雑用なんてパパッと片付けて、ニアアの話聞いてよ！」

「では手伝ってくださいる？」

にっこり笑って聞くと、彼女は「そんな気分じゃないわ」とすんなり引き下がってくれた。一度だって書類仕事をしたことがない彼女には、任せたとこで何も分からないだろうけど。

「もうっ！ お姉様ったら、可愛い妹の愛する人のお話くらい聞いてくださってもいいのに」

可愛らしくむくれて見せるが、微かに嘲笑の気配が含まれているのは見逃さなかった。

たぶん、私が妹の話に嫉妬して追い出したがっていると思っ
ているのだろう。ただ純粋に興味がないだけなのに、こ
ういうやりとりの積み重ねで、ニアは私が彼女を羨んで
いると判断しているようだ。

「あなたが幸せだというのはもう十分に分かっているわ。だから仕事をさせてちょう
だい」

「ふん、もういいわ。お姉様といっても退屈なもの。お母様にシヨッピングに連れてつ
てもらおうと」

軽やかに立ち上がり、来た時と同様に挨拶もなく執務室を出ていく。

私は今更その身勝手さに呆れることもなく、ただペンを持つ手の動きを再開させた。

「……相変わらず、頭の中にお花が咲き乱れている様子で」

書類仕事の整頓を手伝ってくれていたメイドのアニーが、閉じた扉に視線をやつて冷
めた口調で言う。

「アニー、言葉がすぎるわよ」

小柄なアニーより頭ひとつ分高いしっかり者のハンナが、私のためにお茶を淹れ直し
てくれながら窘めるように言う。

「ニア様つてえ、あたしたちの存在まったく見えてないですよねえ」

のんびり掃除をしながら、おっとりした口調でジェマが言う。高い棚の上のホコリを
取ろうと頑張っているけれど、大きな胸が少し邪魔そうだ。

「爵位の高い男しか見えない『特別性』の目を持っているのよ」

「あまり羨ましくない『特別』ね」

「あら、中身はともかく、金持ち爵位持ちの男を見つける目は確かよ？」

「頭にもお胸にも栄養がいかなかった分はそれですかねえ？」

「……三人とも、外でそんな話をしたらダメよ？」

途切れることなく話しながらも仕事の手を止めない三人に、感心半分呆れ半分に注意
をする。こんなこと、ニアや他の使用人に聞かれたら大変だ。

「はい」

「分かっていますつてばユリア様」

「アニーはちよつと信用ならないわ」

「なんでよ！」

ハンナの言葉にアニーが驚いた顔になる。

「だってあんたたまに小さく毒づいてるじゃない」

「あ、それあたしも聞いたことあるう」

「ウツソいつ!?」

彼女たちの軽妙な会話を聞きながら思わず笑みがこぼれる。

有能なメイドも三人集まれば賑やかだ。けれど彼女たちの騒々しさは、不思議と耳に心地好い。おかげで先程感じた苛立ちはすっかり影を潜め、妹の新しい恋人の名前もすでに忘れ去ってしまっていた。

妹の自慢話では止まりがちな私の手も、今は好きな音楽でも聴いているかのように順調にペンを走らせている。

家族の誰からも顧みられない寂しい屋敷の中で、彼女たちだけが私の心の支えだった。

第一章

ふと手を止め窓の外を見ると、いつの間にか月が高くまで昇っていることに気付く。ペンを置いて軽く伸びをすると、身体のうちこちがバキバキと乾いた音を立てた。書類はだいたい減ったけれど、まだ寝ることはできなさそうだ。

成人してからも両親に逆らうことなく黙々と過ごすうち、二十一歳の誕生日を迎える頃には家の仕事はほとんど私任せになっていた。いずれは婿を取って私が家を継ぐことになるのだし、その点に関しては別に不満はない。ただ、さつさと相手を見つけてくれないことには跡継ぎも残せない。もう誰でもいいから婿を連れてこいという投げやりな心境になっていたけれど、両親は相変わらず妹に夢中で私のことはほったらかしだ。

何も変わらない状況に、ため息しか出てこない。

お父様たちはブラクストン侯爵家を潰してしまおう気だろうか。それならそれで、私の気持ちは楽になるのだけれど。

そんな縁起でもないことを思いながら、目の前に積み上げられた書類をハンナたちと

地道に片付けていく日々だ。

そうして夏が終わり秋も半ばに差し掛かる頃、ニアアが珍しく体調を崩した。両親とニアアが参加予定の舞踏会を明日に控え、その準備を楽しげにしているのを横目に、領主の業務をこなしていた中でのことだった。

「大丈夫かいニアア。私の可愛い天使。ああ可哀想に。こんなに苦しそうなのに代わってあげることもできないなんて」

「ニアアちゃん、欲しいものはなんでも言うのよ？ フルーツなら食べられるかしら。それともお菓子がいい？」

ベッドに横たわるニアアに、甲斐甲斐しく世話を焼く両親を見てため息が漏れる。彼らはニアアがもう小さな子供ではないということが分からないらしい。

書類にどうしても父のサインが必要で、執務室にも部屋にもいかなかったからまっすぐ妹の部屋に来てみたらこれだ。父も母も、この世の終わりみたいな顔でニアアのベッドに貼り付いている。

「……お父様。こちらにサインをいただきたいのですが」

「うるさい！ この状況が見えていないのか！ 妹が苦しんでいるのにサインだと!? そんなものお前で勝手にやっておけ！ まったく悪魔のような娘だな……」

いくら待っていても終わりが見えないので入口から遠慮がちに声をかけると、父が振り返りものすごい剣幕で捲し立ててきた。

こんな状況で仕事の話をすれば、邪険にされるのなんて分かり切っていた。けれど急ぎの用だったから仕方なく来たのに。娘可愛さで、公文書偽造を当主自身が進言するなんてどうかしている。

ため息を通り越して頭痛がしてきた。

「ああニアア……明日はせっかく大規模な舞踏会だったのに……お前を見初めるものごとくさんいだらう……可哀想に……」

もう私との話は終わったとばかりにベッドに向き直り、目に涙を浮かべながら父が言う。

これ以上彼氏を増やしてどうする気だろう。

冷めた頭でそんなことを思う。

父はニアアの男遊びがそこまで激しいのを知らないから仕方ないけれど。

一年前までなら、スパンは短くとも、一応その時どきに一人としか付き合っていないかったニアアも、今では余裕の同時進行だ。たぶん、うっすら記憶に残っている限りでは、今すでに五人と付き合っているはず。一人か二人は私を知っている時点から入れ替

わっている気もするけれど。

正直、毎日のようにとっかえひっかえしてたから、さすがに疲れが溜まって風邪を引いたんじゃないかと思っている。

もうすぐ冬だ。最近は朝晩冷えるようになってきたから、そのせいもあるだろう。

「ニアちゃんなら王侯貴族の全てのハートを射止めたでしょうに……」

大袈裟ではなく本気でそう思っているらしい母が、目元をハンカチで拭いながら嘆く。「いいのよママ……今回のドレス、出来上がりを見たらあんまりニアに似合ってたかったし……あれはお姉様に譲ってあげて……暗い色だからきつとお姉様にぴったりだわ……」

わざとらしいくらい弱々しい口調でニアが言う。食欲がないのは本当らしいから仮病ではないのだからけど、弱ってなお私を馬鹿にすることを忘れない。ベッドから起き上がることもできずにいるにもかかわらず私を嘲笑う。

それさえも両親には天使の微笑みに見えるのだろう。

「そうね、ニアちゃんにはもっと明るくて華やかな色が似合うわ。次のパーティーにはまた新しいドレスを仕立てましょうねっ」

「優しい子だニア。こんなにつらい時にも人でなしな姉に施しを与えてやるなん

て……！」

感極まったようにニアの手を握る二人に、馬鹿らしくなってしまうという部屋を出る。

領主様のお許しも出たことだし、私が書類に父の名を書いておこう。

早く仕事の続きをしなければと足早に廊下を歩く。

ふと足を止めて俯いた。視界がいつの間にか暗い。

外はもう夜だ。窓からはわずかな星明かりしか入ってきていない。

短くため息をついて、明かりの満ちたニアの部屋とは対照的に真っ暗な廊下を再び歩き始める。

私の執務室に続く廊下はいつも暗い。屋敷の隅っこの自室兼執務室。両親や妹の部屋とは遠く離れた場所にある。他に誰も行かないのにもつたいないからと、廊下に明かりを灯すことも許してくれないのだ。

妹が体調不良を訴えれば、両親はあんなふうに飽きもせず妹の部屋に入り浸り、自ら世話を焼いている。

私が一週間床に伏せるような病気になった時には、親しくもないメイドが出入りするのみだった。その頃すでにジェマたちは仕えていてくれたのに、彼女たちが出入りするのをニアが意地悪で阻止していたのだ。ロクに身動きもできない高熱の中、耐えがた

い孤独を与えた張本人は今、両親だけでなくお気に入りの使用人たちに囲まれている。妹はパーティーのたびにドレスを新調してもらえるのに、私は妹が気まぐれにくれるお下がりだけ。姉なのにお下がりのないのだ。それさえ着ていく場所がない。

その扱いはもう慣れたつもりでいたのに、こうやってあからさまな差別を目にするのと、どうしても気分が沈みがちになってしまう。

馬鹿みたいだ。何をまだ期待なんてしているのだろうか。

泣きそうになるのをぐっと堪えて歩き出す。こんなことでへこんでいる場合ではない。執務室に戻れば、今日中に片付けなくてはならない書類が山積みなのだから。

「ああユリア様！ いかがでしたか？」

部屋の扉を開けると、パツと明るい光が目飛び込んで、アニーが心配そうに駆け寄ってきた。

「廊下はお寒かったですでしょう。何度か様子を見に伺ったのですが、埒が明かなそうだったので」

「せめてもと思ってお部屋を暖めておきましたあ！」

ハンナがカーディガンを肩にかけてくれて、ジェマが敬礼の真似事をする。その言葉

の通り部屋の中は暖かく、いつの間にか強張っていた身体から力が抜けていく。

「……ありがとう。おかげさまでなんとかなりそう」

使い古された私のカーディガンはところどころ毛玉ができていたけれど、とても暖かった。



窓から差し込む陽差しをそのままに、書類にペンを走らせる。

少し眩しかったが、カーテンは開けたままにしていた。陽光の刺激で、まだ眠い頭が冴えていくのが好きだった。

「何をしている。早く着替えなさい」

「は？」

唐突に執務室のドアが開いて、仕事にもかかわらず父が不機嫌な顔を覗かせた。

「着替えならもう済ませておりますが」

「馬鹿が。そんなみすばらしい格好で何を言う」

冷たい目と声で見下すように言う。

みすばらしい服しか与えてこなかったのは自分たちのくせに、なぜそんなことを言われなくてはならないのか。ニアの十分の一でも服飾費を割いてもらえていたら、擦り切れた服を繕う必要もなかったのに。

「髪も顔もひどい。メイドをつけてやるから昼までになんとかしてこい」

「ですから、さつきからなんなのですか。いつもと同じように仕事をしているだけでしょう」

「いつもとは違うから着替えろと言っている。頭の悪い奴だ」

顔を歪めうんざりしたように言われてカチンとくる。説明不足なのは明らかに父のほうなのに、なぜ私が侮辱され続けているのだろう。

自分に非はないのに、言い返す勇氣はなかった。文句を言えば簡単に捨てられてしまう。小さい頃から本能的に分かっていて、我慢するのが癖になってしまっているのだ。

「……察が悪くて申し訳ありません。今日は、何か特別なことがあるのでしょうか」
怒りを抑え込んでなんとかそれだけ口にする。

父はわざとらしく深いため息をついた後、「反抗的な娘だ」と呟いた。結局は私が何を言おうと気に食わないのだろう。

「心優しいニアが、自分の代わりにお前を今日の舞踏会に出席させてやれと言った。

出会いのない可哀想なお前を慮おもんばかってな。感謝しろ」

そんなこと言われても、余計なことをとしか思えない。

ニアのことだ、絶対に気遣いや優しさなんかではないはずだ。きっと初めて華やかな場に出されて戸惑う私を想像して楽しんでいるのだ。それに、場違いな私が惨めな思いをするのを期待している。

ニアの考えることなんて簡単に分かった。父と母だけがニアの無邪気な演技に騙されて、いつまでも夢中で可愛がっていられるのだ。

「……ニアの体調はまだ戻らないのですか」

「お前と違って繊細な娘だからな。屋敷に一人残していくのは心配だが、どうしても外せない夜会だ。可哀想だが仕方ない。メイドたちに手厚く看護するよう言っておいた」
本当にひどい扱いの差だ。わざわざ見せつけてくれなくていいのに。

私が病気で臥ふせている間、ニアと三人で旅行に行ってしまった人のセリフとは思えない。

「お父様たちだけで行かれればよろしいのでは？」

「可愛い妹の気遣いを無下にする気か。まったくどこで育て間違ったんだ……優しさの欠片もない奴め」

育て方ならスタートの時点から間違っている。こんなにあからさまな鼻唄がなければ、私も妹もこんなに歪んだ性格にならなかっただろう。

「それに今日の夜会は若い世代のお披露目会でもあるからな。お前程度でもないよりはマシだ」

私程度と言うが、ブラクストン侯爵家を継ぐのは私なのだ。本来なら妹よりも私を連れていくのが正しいことなのに。妹可愛さに狂ってしまった両親は、それさえも分からなくなってしまうているようだ。

「……分かりました。では支度をしてまいります。ただ、私はパーティーに出席できるようなドレスを持っていないのですが」

「昨日のニアアの話聞いていなかったのか。ドレスを譲ると言われただろう。新しい仕立屋に頼んだせいでニアアに似合わぬ失敗作だが、お前になら十分だろう」

嘲笑うように言って、ようやく父がドアを閉めて廊下を引き返していく。その表情はニアアにそっくりだった。

結局、父は扉の前から動くことなく言いたいことだけ言って去ってしまった。私の部屋には、入ることすらしたくなかったらしい。

一人ぼつんと残されて、私は深く深くため息をつくことしかできなかった。

大きな鏡台の前に座らされ、慣れない状況に背筋を伸ばして固まる。

「ユリアお嬢様、眉間にシワを寄せないでくださいまし」

「は、はい！」

「ユリアお嬢様、肩が上がっていますわ。力を抜いてくださいな」

「はい！」

私の周りで、馴染みのメイドたちが忙しなく手を動かしては何度も注意を促してくる。父は初め、私に敵意を持っているメイドをつけようとした。けれど彼女たち三人がそこに割り込んで立候補してくれたのだという。

数多くいるメイドたちの中で、彼女たちだけが変わらずに私に好意的で、今回のメイクアップやドレスアップを進んで引き受けてくれたのだ。

「ねえニア、このイヤリング、私には少し派手すぎない？」

「確かにお嬢様は清楚なのがお似合いですけどね。全部清楚にしたら男に舐められます」「そ、そうなの？」

「チョロ口って思われたら負けですよ。ただでさえユリア様、経験値ゼロなんですから」

「そ、そうね」

ごくりと喉を鳴らして居住まいを正す。二人の言うことはもつともだ。鏡に映る私は確かに自信のなさそうな顔をしていて、ジェマの言う「チョロい」女そのものだった。「アニー、ジェマ。あんたたち脅すようなこと言わないの。お嬢様、あまり気負わないでくださいね」

「ありがとうハンナ。恥をかくようなことだけはしないように気をつけるわ」

励ますように言ってくれるハンナに頷きうなづを返す。その間も彼女たちの手は動き続け、私のメイクは順調に完成に近付いていく。

「でも、イヤリングは確かにこれくらい攻撃的なほうがいいです。チャライ男への牽制になりますので」

「……私にはよく分からないので、あなたたちにお任せするわね」

着飾ることの塩梅がまったく分からなくてお手上げだ。

テキパキと髪を結びあげメイクを施していく彼女たちは確かに有能で、完成のビジョンがすでにあるのか迷いはない。

「はあ、それにしてもようやくユリア様を飾り立てることができて感無量です……！ドレスも良くお似合いで！」

「これ、ニーアが気に入らなかつたみたい。私は結構好きな色なんだけど」

着せられたドレスの裾に視線をやりながら言う。まるで星のきらめく夜空のようなデザインだ。とても綺麗だと思うけれど、ニーアがいつも好んで作らせるような派手さではないから、彼女の視線には触れなかつたのだろう。

「そりやそうですよ！ こんな上品な濃紺、あの下品な金髪には似合いません」

「ちよつとアニー、いくらなんでも言いすぎよ」

「いいじゃないちよつとくらい。ハンナは真面目すぎなのよ」

「でもお、確かにこのドレスだとニーア様のお肌と髪の色には合いませんよねえ」

ジェマがおっとり言っ、アニーとハンナが同意する。

「くすんで見えるわよね」

「老けて見えるわ」

容赦なく言っ、あとはもうニーアになど興味はないとばかりに私を褒め称えてくれる。

ニーアは美しい母譲りの明るいブロンドに血色のいい肌の色をしている。

対する私は父譲りのアッシュグレーに、外に出ないせいかな健康な青白い肌だ。

生まれた時から天使のようで、両親が妹ばかりを可愛がるのはよく理解できた。だから

らニアアのブロンドを下品だと言い捨てる人がいるのは衝撃だった。

彼女たちはいつも無条件で私を褒めてくれる。優しい人たちだ。家の中で家族扱いされない私を不憫に思ってくれているのだろう。自分たちの仕事もある中で私が孤立しないよう気遣ってくれて、いつも申し訳なく思いつつも感謝の気持ちでいっぱいだった。

いくら着飾っても、両親に愛されないのは分かっている。元が違うのだから、どんなに努力してもニアアのようにはなれないだろう。

だけど彼女たちが精一杯頑張ってくれている。

ならばせめて今日くらい、私だけは私を愛してあげよう。

そう決めて、鏡の中の自分から目を逸らさずにまっすぐ前を見続けた。

「……お綺麗です、お嬢様」

うっとりとしたハンナが言っていて、姿見に映った私に見惚れている。その頬は紅潮していて、とても社交辞令やお世辞には聞こえなかった。

気恥ずかしかったけれど、アニーもジェマも潤んだ目で何度も頷くから、否定するのは悪い気がして「ありがとう」と言っていて微笑んだ。

胸のあたりは少し苦しかったけれど、コルセットやドレスのデザインのおかげか、鏡

に映る私はスタイルがとても良く見える。父は失敗作のドレスと言っていたが、とてもそんなふうには思えない。こんな私でも、立派な淑女に見えるから不思議だ。

いつもは外に出ることもないので、ノーメイクに口々に手入れもされない髪、それに目立たないような地味な服というのが常だった。ずっと座りっぱなしで書類仕事をしているからと、楽な格好ばかりだったのだ。そもそも手持ちの服自体少なかったたので、選択肢さえなかったのだけだ。

こんなに着飾ったのは生まれて初めてで、恥ずかしさが勝ってなかなか直視することができない。けれどハンナたちがあまりにも手放しで褒めてくれるので、素直に嬉しかった。

彼女たちの言うように、このドレスはニアアよりも私に合っている気がする。彼女たちがこんなに頑張ってくれたのだ、今日くらいは自惚れてもいいだろう。そのドレスの色は確かに私の髪や肌の色によく馴染んで、冴えない顔を引き立ててくれていた。

いつもニアアが好んで着るのはもっと明るいピンクやオレンジばかりだったから、もし今回もそうなら事故だった。あんな明るい色は絶対に私には似合わないのだから。

彼が望むからそろそろ大人っぽい格好をしようと思うのよね、と少し前に言っていたような気がするから、その影響だろう。ニアアの彼氏という存在に、生まれて初めて感

謝したい気持ちだった。

「アニー、ジェマ、ハンナ。本当にありがとう。みんなのおかげで胸を張ってパーティーに出席できるわ。遅めの社交界デビューになってしまったけど、恥をかかないように頑張ってくるわね」

「恥をかかないどころか注目の間違いなしですよ！」

「うふふありがとう。そんなこと言ってくれるのはあなたたちだけよ」

「もう！ 全然分かってないんですから！」

アニーが地団駄を踏むように言って、ハンナが諦めたような顔でアニーの肩を叩いた。いつも私の扱いに不満を訴えてくれる彼女たちだから、初めて華やかな場に出る私が気後れしないで済むように励ましてくれているのだろう。

「ユリアお嬢様は世界一お綺麗ですよお。少なくともあたしたちの中ではそれは絶対です」

「……ありがとうジェマ。みんな大好きよ」

少し泣きそうになりながらジェマたちを抱きしめる。

せつかく時間をかけてメイクをしてくれたのだから、それを崩さないように耐えるのに必死だった。

それからハンナたちに送り出されて両親のもとへ行く。

けれど二人はちらりと私を見ただけで、すぐに興味をなくしたように目を逸らしてため息をついた。

「まったく大した素材でもないくせに待たせおって……」

「いいじゃないですかあなた。一生に一度のことで浮かれていますよ」

彼らの蔑むような言葉に、あんなに褒めてもらえて嬉しかった気持ちがあつという間にしぼんでいく。

「ニーアに感謝することだな。ドレスのおかげで多少マシに見える」

「ドレスだけがまともに見えるのではなくて？」

ほほほ、と笑う母に、父が「それもそうか」と腹を抱えてゲラゲラと笑った。

悔しかったけれど、反論することもできずに俯く。

褒めてくれるなんて期待したわけではないけれど、少しくらいは何か言ってもらえると思ってしまった自分が情けなかった。

「お待たせしてしまい申し訳ありませんでした……」

あんなに褒めてもらって、少しは前向きに代役を楽しむ気持ちになれていたというのに、二人を前にするとどうしても萎縮いしやくしてしまう。

もう反論できる歳なのに、幼い頃の愛されたかった記憶が邪魔をするのだ。「さあ行こう。ニーアのいない穴を埋めることは無理でも、まともな受け答えくらいはするんだぞ」

「はい……」

ソファから立ち上がりながら釘を刺すように言う父に頷く。

さっきまでの楽しい気持ちはすっかりなくなってしまうていた。

「せいぜい若い男に媚を売っておけ。陰気な姉がいると知ればニーアの価値まで下がるかもしれないからな」

「足を引つ張らないでちょうだいね」

私を見もせず玄関に向かう両親の後にひっそりつき、惨めな気持ちのまま馬車に乗り込んだ。

遅ればせながらの社交界デビューは、想像以上のものだった。

王宮主催のダンスパーティーの、目もくらむような煌びやかさに圧倒されてしまう。

「何をボサツとしている。みつともないからキビキビ歩け」

冷たい口調にハツとして、つい止まってしまった足をなんとか動かし両親についてい

く。彼らはこれ見よがしにため息をついて、場に馴染めないでキョロキョロしてしまう。私を最上の娯楽とでもいうように嘲笑った。

「まったく。田舎者丸出しで恥ずかしい」

「女としてはすでに臺とくが立っているというのに、自覚がないのかしら」

責めるように言われたって、社交の場での振り舞いさえ教えずに急遽こんな大舞台に立たせたのは父だ。せめて一週間の猶予があれば、自分で調べて最低限の身の振り方を学ぶ努力だってできたのに。

それに、どうせ結婚相手は親が決めるのだからと、社交界デビュー自体させてくれなかったのは母だ。私のドレスやメイク道具にお金をかけたたくないのは分かっていたけれど、妹には何十着もドレスを与え、流行の変遷と共にメイク道具を一新するその最前ぶりを何年も見続けるのはつらかった。

女としても価値がないのだとしても、一生縁がないと思っていた華やかなパーティーに密かに心を躍らせることくらい、させてくれないのに。

「ああ嫌だ。あの子のドレスを着せてもらったからって、それであの子と同じようになったなんて図々しい勘違いをしないでちょうだいね」

それでもハンナたちが懸命に仕立ててくれた淑女の顔を崩したくなくて、俯くのを堪

える私に母が追い打ちをかける。

「……分かっています」

ぎゅっと拳を握り締めてぎこちなく笑う。私がニアみたいになれないことなんてとつくの昔に思い知っている。だからこれまで一度もでしゃばらずにいたのだ。

「ふんっ、辛気臭い娘だ」

ニアのように明るい笑顔を作れない私に、父が苦り切った顔で言う。母が同意するように肩を竦めた。

私は逃げ出したい気持ちになりながら、結局は一步も動けずに沈黙した。

「やあブラクストン卿。今日はニア様はご一緒ではないのですか？」

ふいに陽気な声がかかる。父の表情が一変して、私の背後へ快活な笑みと共に片手を上げた。

「これはどうもハンプシャー卿。実はニアは風邪を引いてしまいましたな」

「それは残念だ。可憐なお嬢さんに、ぜひともうちのほんくら息子を紹介したかったのに」ハンプシャー卿と呼ばれた、父と同年代の男性の隣にいた青年がぺこりとお辞儀をする。整った容姿に爽やかな笑顔。きつとニアがこの場にいたら目を輝かせていたことだろう。

「はっはっはご謙遜を。ご息子の活躍は聞き及んでいますよ。いやしかしそうでしたか、まだうちの娘と顔を合わせたことはなかったですな」

にこやかな笑みを浮かべた青年が父と握手を交わす。慣れた動作だ。ニアと面識はなくても、社交界が初めてというわけではなさそうだった。

「お噂はかねがね。さぞ美しいご令嬢なのでしょうね」

「いやいや。親の欲目を差し引いてもなかなかではないかな」

「まあ、あなたったら」

臆面もなく言い放つ父に母が否定するでもなくコロコロと笑う。それだけニアを愛していて自慢に思っているということだろう。

「僕はそちらの美しいお嬢さんがニア様かと思ったのですが」

ハンプシャー家令息が、人好きのする笑みで私に水を向ける。同時に視線が集まり、思わず身体が強張った。

彼は父たちの連れである私に気を遣って、お世辞を言ってくれたのだろう。優しそうな人だから、冴えない顔で黙っている私を哀れに思ったのかもしれない。

「ははは。お気遣いどうも」

「いえ、気遣いなどでは……」
 笑顔を浮かべながらも声のトーンが一段下がった父に、青年が戸惑ったような顔をする。

「確かニア様にはお姉上がいらっしゃいましたか。社交界に顔を見せないのを不思議に思っていました。なるほど。これほど美しくしては隠しておきたくなる脚のお気持ちも分かる」

その微妙な空気の変化に気付かなかったのか、ハンプシャー卿が闊達かつたつな笑い声を上げた。

「いやいやまさか。皆様にお見せするのも恥ずかしいような娘でして」

白々しく笑いながら父が言う。謙遜などではなく本気で言っているのはすぐに分かった。

「何をおっしゃいますやら」

「本当ですよ。ニアと違って礼儀作法も身につかず、暗い顔ばかり。社交界に相応しくない手持ちで余しておりましたの」

お恥ずかしいことですね、と母が笑う。彼女の手にかければ、あつという間に私は無能でセンスのない愚か者に仕立て上げられてしまう。

「しかし、そんな無教養な女性にはとても……失礼ですが、お名前をお伺いしても？」

青年が気遣わしげに問うてくる。私はそれに答えていいのかも分からずに、ちらりと父の顔を窺った。父は笑顔を貼り付けながらも、不機嫌な色を滲ませているのがよく分かる。

媚を売れと言ったのは父なのに、私に注目が集まるのは面白くないのだ。けれどそんな矛盾を突く勇氣もなく、私は何も言えなくなってしまうとどうとう俯いてしまった。

結局はこうして両親のご機嫌取りばかりして、判断を委ねてしまう自分も大嫌いだ。

「……ああ失礼、先に名乗るべきでしたね。僕はディアン・ハンプシャー。よろしく」

沈黙を自分のせいだと思っただけらしいディアンが、気分を害したふうでもなく名乗って微笑んだ。

いたたまれなくなつて、これ以上失礼な態度を取ってしまう前にもう一度父を見る。彼は面白くなさそうな顔で「早くお答えしなさい」と私を急かした。

「……ユリア・ブラクストンと申します。お会いできて光栄です」

父の態度は納得いかなかったけれど、これ以上彼に気を遣わせるのが嫌で、控えめに微笑みながら答える。すると彼は嬉しそうに表情を緩めた。

「ユリア様とおっしゃるのですか。美しいお名前ですね。あなたのその楚々とした笑顔にぴったりだ」

女性を褒めるのに慣れているのだろう。ディアンは恥じらうこともなくまっすぐに私を見てそう言った。

「もしよろしければ、僕と一曲踊っていただけませんか」

「えっ!？」

唐突な申し出に素っ頓狂な声を上げてしまう。それがおかしかったのか、ディアンが破顔した。自分のみっともなさに頬が熱くなる。

「それがダンスも下手くそで」

「ニアならどんな曲でも完璧に踊れるのですが」

その不様さを嘲笑うように、父と母がこぞとばかりに私を馬鹿にする。そうして彼らは私への社交辞令さえニアへの麗句に変えてしまう。私が褒められること自体が許せないのだろう。

「なんだ、そんなこと。それでは僕がレッスンして差し上げますよ」

けれどディアンにそんな空気は伝わらなかったのか、こともなげに右手を差し出し笑顔で言う。

「いえ、そんな図々しいことは」

「なあに、そう心配召されるな。うちの息子はダンスだけは得意でね」

「ただだなんて。ひどいなあ父上は」

仲の良い親子なのだろう。貶すような言葉にさえ愛情を感じて羨ましくなる。うちとは正反対だ。

「何をしている。ディアン殿の手を早く取りなさい」

「……では、お言葉に甘えて」

結局両親はディアンとハンプシャー卿の提案を無下にもできず、忌々しげな顔で私がダンスホールへと連れ出されるのを見送ることとなった。

「初めてのお相手が僕では力不足でしょうが」

親の視界から外れたのに私がいっまでも不安な顔をしていたせいだろう、苦笑しながらディアンが言う。

「いいえそんなこと！ 私のほうこそ気を遣わせてしまい申し訳ありません」

「気を遣う？ なぜそう思われたのですか？」

「壁の花にならないようにしてくださいでしたかったですか？」

ハンプシャー卿と父はそれなりに交流が深そうだった。その娘が恥をかかないように、

彼は気を利かせてくれたに違いない。

「あなたが壁の花!? まさか!」

ディアンが驚いたように目を丸くする。

「ありえない。あなたはご自分を知らなすぎる!」

断言するように言いながら、ディアンが綺麗な姿勢でポーズをとる。反射的に私もホルドを組んだ。

同時に、今まで流れていた音楽が終わって、次の曲が流れ始めた。

「予告しましょう。このダンスを終えた後、あなたへの誘いは途切れることがない!」

ディアンに合わせてステップを踏み始めると、緊張をほぐすために、彼が笑いながら冗談を言う。

「それこそありえない話だと思えますわ!」

それに苦笑して返す。何度かこういった場に顔を出して知り合いを増やしてからならともかく、知人もおらず、両親から進んで紹介されるわけでもない初参加の地味な女が、誰かの目に留まる理由はない。

「なんだ、お上手じゃないですか!」

「ありがとうございます。こうした場で踊るのは初めてなので、少し恥ずかしいです!」

とても褒められるようなステップではなかったけれど、若い男女のひしめき合うダンスホールではこれくらいでも悪目立ちせず済んでいる。本当に、最低限のダンスだ。誰かと踊った経験はもちろんなし、人に習ったこともない。けれど窓から見えるニアの練習風景に憧れて、漏れ聞こえる音楽で自己流で練習したのだ。見様見真似のシャドーダンスは虚しかったけれど、この場で大恥をかくことにならずに済んで良かった。

ディアンは話しやすい人で、ダンスの間も会話が途切れることはなかった。しきりに話題を振ってくれるのをありがたく思いながらも、男性との会話スキルのない私には領きを返すだけで精一杯だった。

ふと、この地味な人生の中で唯一楽しいと思えた男性との会話を思い出す。

内容は領地の運営についてだったから、今みたいに華やかなものでは全然なかったけれど。

ひどく味気ないものだったな、と今更気付いて忍び笑いが漏れる。

「ダンスも楽しいものでしょう?」

「……ええ、本当に!」

ダンスに対してではなかったけれど、別のことを考えていたなんて失礼なことも言えずに頷く。会場に入ってから初めて出た自然な笑顔は、パーティーとはまったく関係な

いものだったのがおかしくてまた笑う。

ディアンは満足そうに微笑み、最後まで完璧なエスコートでダンスをリードしてくれた。

曲が終わってもディアンの手は離れずに、しばし見つめ合う。

女性から手を離すのがマナーだろうか。どうしていいかも分からずにじっとしていると、ディアンが目を細めた。

「……本当に、美しい方だ」

「え？」

「もちろん見た目だけではありません。こんなに艶やかなのに驕おごったところもなく、表情は可憐で、不思議な魅力がある。大人びていると思えば時々少女のようで、目が離せない」

次々と並べられる美辞麗句に戸惑う。どちらの親もいないところで、こんなに褒めてくれるメリットがよく分からないのだ。先程の会話から予想するに、たぶんこの方はハンプシャー家の嫡男だ。私相手に婿入りを狙っているわけでもないだろう。

「ええと、あの」

「あなたさえ良ければ、この後僕と」

「やあディアン。ずいぶんと楽しそうに踊っていたじゃないか」

不意に声がかかって、ディアンと同時に視線を向ける。その先には数人の男性がいて、いずれも身なりや容姿の整った華やかな一団だった。

「……これは、どうも」

ぎこちなく笑顔を浮かべたディアンが短く挨拶を口にして、するりと手が離れていく。彼の知り合いらしい男性たちは、自信に満ちた堂々たる足取りでこちらへ近づいてきて、ディアンの隣に立つ私にまで愛想のいい笑みを向けてくれた。仕立ての良い服だけでなく、立ち居振る舞いからも爵位の高さを窺わせる。

「そちらのお嬢さんを私たちにも紹介してくれるかい」

彼らの中でも一番身分の高いと思われる青年が、断られるなんて微塵も思っていない顔で言う。どういう力関係なのかは分からないけれど、ディアンが一瞬だけ悔しそうに顔を歪め、それから再び爽やかな笑顔に戻った。

「……こちらはユリア・ブラクストン嬢です。なんとニア・ブラクストン嬢のお姉上なのですよ」

「へえ！ このご令嬢が!？」

彼らは目を丸くして、私の顔をマジマジと見た。ニアはやはり有名人らしく、彼女

に似ても似つかない私が面白いのだろう。

「ユリア・ブラクストンと申します。以後お見知りおきくださいませ」

興味本位の視線が集まるが、物怖じせず堂々と名乗ることができたことにホッとする。ディアンがリードしてくれたダンスで緊張がほぐれたおかげもあるし、何より両親の目のない場ではきちんと萎縮せずにいられるらしい。

見知ってもらったところでまた社交の場に出られる日がくるとも思えなかったけれど、それをわざわざここで言う必要もない。それに彼らにもう会うこともないということが、緊張せずに済んでいる一因かもしれない。

「次は私と踊っていただけますか？」

ディアンに最初に話しかけた青年が進み出る。周囲の反応を見る限り、おそらくこの中で一番身分が高い方なのだろう。

「……ええ喜んで。お名前をお伺いしてもよろしいでしょうか？」

少し悩んで応じる。

それが正しい判断かは分からなかったけれど、たとえ間違っていたとしても、今は両親のもとに戻りたくなかった。

「マクレガー侯爵家嫡男のアルバート・マクレガーと申します。どうぞバートとお呼び

ください」

自信たっぷり差し出された手を取ると、ちょうど次の曲が始まるころだった。

「ディアン様、最初の一曲を踊ってくださいありがとうございます。とても楽しいひとときでした」

ここまで連れ出してくれたディアンにお礼を言って微笑みかける。両親の目から解放された喜びが、少しでも伝わるといいのだけだ。

「いえ、あの……こちらこそ、ありがとうございます」

ディアンが何か言いたそうに手を上げたが、結局は寂しげな笑みを浮かべただけで、何も言わずにその手を下ろした。

「ダンスはあまり得意ではありませんか？」

先程よりも速いテンポの曲調に、なんとかついていけているという状態を見抜いてバートが笑いながら言う。

「ええ、恥ずかしながら」

それでもバートのリードが上手くて、ギリギリのところまで不様な姿を晒さずに済んでいる。